令和５年度　(インクルーシブ教育実践研究校 B)報告書　安佐学校

１　学校の課題

本校の教育的支援を必要とする生徒として年度当初に把握している生徒は５５人となっている。教員がそれぞれの感覚で生徒を捉え、それぞれが必要だと思う支援をしており、学校として生徒を理解する上での視点が定まっていないことが課題である。教員は、生徒それぞれの困難さに対して、生徒への最適な支援を考えながら授業を行っているが、その中で、自分の意見を自由に発表できる場、自分の意見を受け止めてもらえる場、そして自分の意見をさらに良いものにするために対話できる「認め合い、支え合い、励まし合う」場を各教科の授業に取り入れることで配慮が必要な生徒の行動面や学習面の困難さを助け、基礎学力の定着につながるものと考える。合わせて、生徒への最適な支援として ICT 機器の活用にも取り組みたい。

２　研究主題

認め合い、支え合い、励まし合う授業づくりの推進

３　取組内容

⑴　生徒理解の深化

①　生徒の実態把握を行う際の視点の整理（※別添資料：①）

②　個別の指導計画の検討

→生徒の実態に応じた具体的な支援の検討（※別添資料：②）

⑵　教員の授業力向上

①　インクルーシブ教育、ユニバーサルデザインの視点からの授業づくり

→学習指導案にインクルーシブ教育の視点における配慮の記入、ユニバーサルデザインを意識した共通の取り組み（※別添資料：③）

②　「認め合い、支え合い、励まし合う」活動の場としてペア・グループ活動の活用

→安佐中スタンダードを意識したペア・グループ活動（※別添資料：④）

③ICT 機器活用

数学科が取り組んだ問題解説動画

【問題解説動画の活用方法】

事前準備

授業で使用するワークシートに教科担任が解説しながら記入していく「ヒント動画」を作成し、Google Classroom にアップしておく。

授業

生徒は、「ヒント動画」を見ながら解く、見ないで解く、など各自で選択して取り組む。教師は生徒の取り組んでいる様子を確認しながら、必要に応じて個別に直接支援を行う。

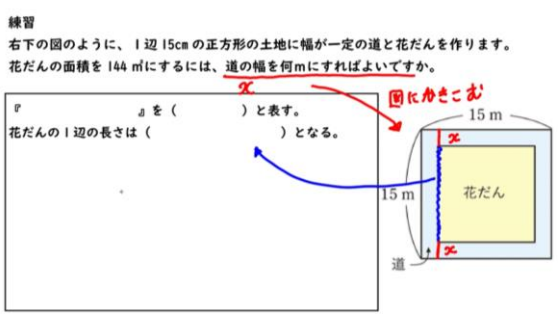
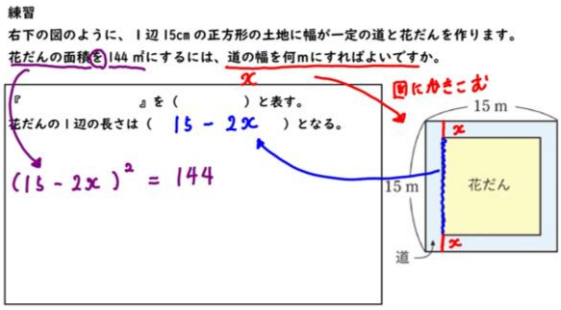
動画が始まると問題の解説が始まる。	生徒は理解できた段階で動画を見ずに問題に取り組むことが可能である。
	

図１　問題解説動画例

問題解説動画が始まると、問題の解説が始まり（図１）、自分の好きなタイミングで見ることを止めることができる。

⑶　対象生徒への取り組み

①医療機関・放課後等デイサービス・SC・SSW 等との連携

→必要に応じて関係機関と連携できる体制づくり

②生徒・保護者と特別支援教育コーディネーターの面談を通した実態把握、必要支援の検討

実態

授業中困った様子は見られないが、忘れ物が多く、課題の提出があまりできない。課題に取り組めないわけではないが、スケジュールの管理や、期日までの計画を自分で立てることなどができない様子が見られた。月１回程度、３０分程度面談を行い、生徒の思いを聞き出しながら生徒と現在の課題克服に取り組む。（表１）

表１　対象生徒の課題と取り組み内容

課題	取り組み内容
忘れ物が多い。	行動のルーティーン化に取り組み、取り組むことを整理してから行動するようにした。
課題が提出できない。	計画を一緒に立てて、いつまでに何をしないといけないかを決め、カレンダー記入し視覚化した。

４　検証結果

⑴　生徒理解の深化

別添資料①による生徒の実態把握を行う際の視点の整理や、共通の視点をもとに個別の指導計画の検討を行うことで、次のような感想が聞かれた。「実態把握の際に生徒を見取る視点が絞れたので実態把握が行いやすい」「今までに無い支援の方法に取り組むことができるようになった」など同じような感想が複数あることと、教員アンケート（表２）からも教員の生徒理解が昨年度と比べ進んだことが分かる。

表２　教員アンケート

項目	昨年度	今年度
生徒個々の特性に応じた「教育的配慮」や「合理的な配慮」を意識して授業している	７３．５％	１００％

⑵　教員の授業力向上

＜教員の意識＞

①インクルーシブ教育、ユニバーサルデザインの視点からの授業づくり

インクルーシブ教育、「ユニバーサルデザインの視点からの授業づくり」や「認め合い、支え合い、励まし合う」活動の場としてペア・グループ活動の活用を学校全体で共通して取り組もうとする意識が定着してきた。特に生徒がお互いを肯定的に評価し合える場を積極的に作るようになった教員が１００％になったのは大きな成果である。（表３）

表３　教員アンケート

項目	前期（７月）	後期（１２月）
授業では、周りの人と話し合うなどして、自分の考えを深めたり、広げたりする活動（共有化）を取り入れている	１００％	１００％
積極的にICT機器を活用している	６３．１％	６８．８％
板書・表示の工夫（視覚化）をしている	８９．５％	８７．５％
生徒が安心して学ぶことができる場づくりができるよう意識的に指導している	１００％	１００％
生徒たちがお互いを肯定的に評価し合える場を積極的に作っている	７８．９％	１００％

②「認め合い、支え合い、励まし合う」活動の場としてペア・グループ活動の活用

ペア・グループ活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたりすることができた生徒が８割を超えている。（表４）対象生徒も肯定的に捉えることができていた。しかし、前期と後期では伸びが見られなかったことや、自分の考えを積極的に伝えたり、うまく伝わるように工夫したりすることは今後の課題である。

表４　生徒アンケート（全校生徒へ実施）

項目	前期（７月）	後期（１２月）
友達や他の人は、あなたの良いところを認めてくれる	９４％	９４．４％
友達や他の人の良いところを見るようにしている	９６．９％	９６．６％
授業時間では自分の考えを積極的に伝えている	６７．２％	６１．２％
授業時間では自分の考えを発表するとき､自分の考えがうまく伝わるように工夫している	７３．５％	７０．２％
授業時間ではまわりの人と話し合うなどして､自分の考えを深めたり、広げたりしている	８３．３％	８４．１％

③ICT機器の活用

数学科における活用について、担当教員は次のように振り返っている。

・一目で支援が必要な生徒が分かり、支援にかけることができる時間が増える。
・分からないから問題に取り組まない生徒が減少した。
・解き方が分かったタイミングで解説を聞かなくて良いので、必要な部分だけしか見なくて良い。

また、（表５）からも問題解説動画の有効性が確認できる。同じようなツールとして、ヒントカードなどもあるが、準備にかかる時間やいつでも見返すことができるなどの良さが、問題解説動画にはある。

表５　生徒アンケート

項目	肯定的に捉えることができた生徒の割合
問題解説動画を活用し、分からない問題を解くことができたことがある	８８．６％
問題解説動画を利用する前より学習が分かりやすくなった	９１．４％
問題解説動画を利用する前より意欲的に学習に取り組むようになった	７１．４％

⑶　対象生徒への取り組み

面談を通しての自分自身の変化を生徒自身は次のように振り返っている。

・自分なりの解決方法があることに気づいた。
・忘れ物が無くなったり、課題が提出できるようになったりしたので自信がついた。
・プラス思考になり、意欲的に学習に取り組むことができるようになった。
・以前と比べ日々の学校生活が充実している。

生徒のニーズを把握し、支援を行うことが本人の成功体験を増やし、学習意欲の高まりにつながる部分もあることが分かった。学習意欲の高まりが定期試験の結果にも良い影響が出たのではないかと考えられる。（表６）

表６　対象生徒の変容

	国語	数学	理科	社会	英語	合計点数	忘れ物	課題提出
前期中間（６月）	６５	２１	５０	６５	４０	２４１	良くある	期限内にできないことが多い
前期期末（９月）	６４	４５	６５	７１	５６	３０１	時々ある	期限内に提出できる教科がほとんど
後期中間（１１月）	６８	５１	６７	７１	７０	３２７	ほとんど無い	期限内に提出できる

５　研究成果

成果

・生徒の実態把握をする際の視点の整理や生徒の実態に応じた具体的な支援の検討に取り組む中で、生徒の特性に応じた指導を意識している教員の割合が増えたことやペア・グループ活動をどの教員も行うことができた。
・ICT 機器の活用として問題解説動画が有効であることがわかった。
・面談を通して生徒の思いを聞き、本人の課題意識に応じた課題解決に取り組むことで、学習意欲や定期試験の結果に良い影響がある場合もあることがわかった。

課題

・ペア・グループ活動をより有効に行うために、活動の仕方を検討する必要がある。
・ICT 機器の活用は教科や教科担任で活用の差が激しいので、効果的な活用方法の検討や使用方法の研修が必要である。
・コーディネーターの面談は有効であるが、担任が行うことは時間の確保の観点で難しいので、どのように行うことが有効であるか検討が必要である。